

イエローストーン国立公園の成立について

親 泊 素 子*

はじめに

世界最初の国立公園がアメリカのイエローストーンに成立したのは1872年3月1日である。日本では1931年に国立公園法が制定され、1934年3月にこの公園法に基づき瀬戸内海、雲仙、霧島の第一回指定による国立公園が誕生した。しかし、日本の国立公園制度はアメリカの営造物の公園と異なる地域制という極めて特異な制度でその運用を開始したために、理想的な公園計画の策定が難しく、公園管理が徹底できないはがゆさからか、この地域制の国立公園というのが格を下げた公園と思われがちでもある。しかし、一方では、池ノ上容は、日本の国立公園は日本独自のものとして、むしろ日本の国立公園のアイデンティティをはっきりと確立していくべきであると述べている⁽¹⁾。そこで少し整理して考えたいのは、アメリカの国立公園が何ゆえに世界で「最初の」とか「画期的」というべき評価を受けたのかということである。かなり広大な公園を連邦政府が管理するという国家所有の公園形態を指すのか、あるいは手つかずの自然をレジャー、レクリエーションに供するという思想を指しているのか、はたまた保護と利用の二つの相反する目的を共存させようとする思想を指すのかなど、つきつめて考えてみると、わが国ではかなりあいまいな認識をもったままアメリカの国立公園の誕生を崇め奉っているようにもみえてくる。

そもそも国立公園の概念とはどこからでてきたものなのだろうか？ 通説では、ウオッシュボーン＝ラングフォード＝ドーン探検隊が1870年9月19日のキャンプファイアーを囲んでの夜にコーネリアス・ヘッジスが提案したといわれている。それではヘッジスはこのアイデアをどのように得たのだろうか？ また、この新しい発想が、単なるキャンプファイアーでの話に終わらず、法律制定までこぎつけられた理由は何だったのだろうか？ この研究はこういった事実を検証することにより、もう一度国立公園誕生の意味について考えてみたい。

当然のことながら、どの国でも国立公園制度をつくる時にまず参考とするのが国立公園の元祖とも言えるアメリカの公園制度である。したがって、日本においても国立公園導入に際しては多くの日本人がアメリカの国立公園を見聞し、いろいろな記事や見聞録を発表している。また、わが国が採用すべき国立公園制度についての論議が「史跡名勝天然記念物」や「国立公園」雑誌等でもさかんに掲載され、新聞での国立公園論争まで引き起こした程である。しかし、初期の頃はもっぱら日本における国立公園はどうあるべきかという論議が中心となり、アメリカの公園概念の発祥に関して疑問を呈するような研究はなされていなかった。ようやく戦後になって、リッチー報告や国立公園法に代わる自然公園法の制定で国立公園の概念が見直されるようになった。例えば、1981年に日本の自然公園50周年を記念して出版された『自然保護行政の歩み』の中で、池ノ上容は自然公園概念の形成に触れ、国立公園の概念がすでにジョージ・カトリンによって発表されていることを記述している⁽²⁾。また、1990年には岡島成行が『ア

2007年11月30日受付

* 江戸川大学 ライフデザイン学科教授 環境政治学

キーワード：イエローストーン、コーネリアス・ヘッジス、ウオッシュボーン＝ラングフォード探検隊、J.クック、ノーザン・パシフィック鉄道

『アメリカの環境保護運動』の中で国立公園誕生のエピソードを紹介している⁽³⁾。1992年には畠山武道が『アメリカの環境保護法』の中でアメリカの国立公園制度にもふれている⁽⁴⁾。また、1993年には伊藤太一が国立公園雑誌の中で「キャンプファイアー神話」に関してかなり克明な分析と鋭い批判を展開している⁽⁵⁾。最近では2000年に加藤則芳が『日本の国立公園』の中で一章を割いて「国立公園のおいたち」をまとめており⁽⁶⁾、2002年には上岡克己が『アメリカの国立公園：自然保護運動と公園政策』を出版するなど⁽⁷⁾、アメリカの国立公園誕生秘話に関してはかなりの紹介がされてきたことがわかる。しかし、いずれの文献においても抜けているのが1870年9月19日の夜のキャンプファイアーを囲みながら、コーネリアス・ヘッジスが述べた“国立公園の概念”の検証である。そこで本論では、このヘッジスの概念を検証しつつ、この概念が法律制定までこぎつけられた成功要因についてまとめてみた。なお、この研究は現在19世紀に公園制度を発足させたアメリカ、オーストラリア、カナダ、ニュージーランドの4ヶ国の国立公園成立の比較研究の一部としてまとめているもので、今回、時間の関係から国立公園成立時のアメリカ社会の時代背景の検証が不十分であることをお許し願いたい。

I. 国立公園思想の誕生について

日本における国立公園誕生の通説は、田村剛の書かれたものが古典書としてよく使われるので、まずはそれを引用してみよう。

「1870（明治3）年9月19日の夜、ウォッシュボーン、ラングフォード探検隊がイエローストーン地方のギボン河畔で野営火を囲んでの一夜、一行はこの驚くべき奇観の営利的利用の方法として、隊員それぞれ望む土地を分割要請するといったところまで進んだ時、一行中の一人コーネリアス・ヘッジス Cornelius Hedges は、まったく革命的な意見を発表した。彼はこの景観を個人に分けて資本化するよりも、全国

民が永遠に享用しうる**国家の保留地**として確保すべきであると力説した。この公民意識に燃える力強い主張に誰一人反対することも出来なかった。ここに国民のための公共用保留地、すなわち Public Park の観念を、広大な地域に適用して、国立公園 National Park を設定すべしという思想が、立派に誕生していたのである⁽⁸⁾。

次に加藤則芳の『日本の国立公園』の本ではどのように説明されているのかというと、

「キャンプファイアーを囲みながら、多くの隊員からでたアイディアは、間欠泉のエリアの権利を取得し、観光開発をしてもうけようというものだった。その中で、コルネリアス・ヘッジスは、『いや、そんなお金もうけのためじゃなくて、ここを衆人が楽しめるために国が管理する公園として指定し、民間の開発から守るべきだ』と主張した。隊員の一人ナザニエル・ラグフォードは、このアイディアに感動し、町に帰ると、数ヶ月にわたって、新聞、講演などを通じて、その驚異的な自然を紹介し、そこを国の管理の下に公園とするよう連邦議会に強く働きかけた⁽⁹⁾」。

また、上岡克己は、次のように記している。

「1870年9月19日の夜、キャンプファイアの周りに集まった隊員たちのなかから、この地の有効な活用方法についての話題がのぼった。ラングフォードはこの時の様子を日記の中で次のように記している。『この地の将来性を見越して自分たちの私有地として名乗りを上げようと話をしていると、やおら立ち上がったヘッジスは次のように語った。その地域のいかなる部分も個人の所有にすべきでなく、全体を大国立公園（great National Park）としてとっておくべきである。私たち一人ひとりが実現できるように努力すべきである』。

ラングフォードの日記によれば、イエロース

トーン国立公園の提唱の榮譽は若い弁護士ヘッジズに与えられることになるが、ラングフォードの日記は国立公園が世に知れ渡った後年になって加筆されて出版されているので、「国立公園」という語が本当にこのとき使われたのかどうかは定かではない⁽¹⁰⁾。

この不確かさに関して上岡はアルフレッド・ランテ (Alfred Runte) の『National Parks: The American Experience』から引用している⁽¹¹⁾。また、伊藤太一もこの不確かさを指摘しながら、この「焚き火物語」が理想化された形で流布するようになった原因として、チッテンデンが1895年に出版した著書の中でラングフォードの日記を紹介し、それが国立公園を普及したい人たちによってより脚色された形でこの神話が流布されていたと分析している⁽¹²⁾。

アメリカにおいては国立公園の誕生後に、「われこそが…」とその栄光を自分の手柄にしようとする人たちが現れ、この画期的なアイディアの立役者をめぐり、歴史研究者が数々の論文を発表している。こういった多くの歴史研究者の議論の中、イエローストーンで働いていたこともあるオーブリー・ヘインズはこの画期的なアイディアが話された晩のコーネリアス・ヘッジズやラングフォードの日記にそういった記述が一切ないということ述べ、その晩の出来事に疑問を呈している。もし話し合われたのであれば、そういった感想が記されてもおかしくはないのに、そういった内容は見当たらず、平凡な記述で終わっているのも不思議であると述べている⁽¹³⁾。一方、ジム・マクドナルドは、逆に、ラングフォードが後に改ざんして書いたであろう記述に対して、これまた反論が出てこなかったということから察して、この話がなかったともいえないといった逆の見方で解釈をしている⁽¹⁴⁾。

このように日本ではコーネリアス・ヘッジズがキャンプファイアーの夜に国立公園の概念を提唱した通説が受入れられているが、アメリカの歴史家の間では、正直なところ、本当に「国立公園」の概念が1870年9月19日の晩にヘッジズによ

て提唱されたのかどうかは立証されていないと結論付けている。しかし、この国立公園の概念についてはコーネリアス・ヘッジズが最初の発案者ではないということは日本人研究者も承知している。ハンス・ヒューもこの「キャンプファイアーの物語」について、「もし、それが本当に（新しい考え）であれば、それは奇跡としか言いようがない」と述べており、すでにそういった概念が受け入れられる土壌がアメリカ社会に醸成されていたのだと述べている⁽¹⁵⁾。ハンス・ヒューは『ヨセミテ：この概念の物語』をシェラクラブの雑誌に寄稿していることから、ヨセミテグラント州立公園の影響を示唆しての発言だと思われる。そこでそういう土壌があった根拠として、すでにヘッジズ以前に国立公園の概念、もしくはそういった発想を提唱した人物について調べてみると、これまた複数の説が出てくる。すなわち、ヘッジズの考えは以下の人々に続くもの、あるいは彼らの影響を受けて発言したものとされる。

- ① ジョージ・カトリン、クエーカー教徒のデビッド・E・フォルサムについて三番目
- ② カトリン、ヘンリー・D・ソローについて三番目
- ③ カトリン、フォルサム、トーマス・F・ミーガーについて四番目

それではこれらの人物はどのような形で国立公園の概念を世に発表していたのだろうか？

① ジョージ・カトリン (George Catlin)

日本ではカトリンとかキャトリンと訳されているが、彼は1832年にミズリー川をイエローストーンと名付けた蒸気船でくだった画家で、インディアンを描いた絵を持って戻ってきた。その時にメキシコからウイニーベグまで広がる土地の一部を広大な国民の公園 (Nation's Park) として保護し利用する考え方を述べた⁽¹⁶⁾。この考えについて注目すべきは、Nation's Parkの地域内にインディアンとバッファローが共にすむことを提唱している点である。これは明らかに公園専用の地域として人々の居住を排除する営造物の公園をイメージしているのではなく、むしろこの地域に住むイ

ンディアンの公園内での生活の営みを容認しているという点で、アメリカにおける国立公園の最初概念は地域制の公園だったといってもよいのではないだろうか。

② ヘンリー・デービッド・ソロー (Henry David Thoreau)

カトリンの Nation's Park の概念は 1833 年に『ニューヨーク・デイリー・コマーシャル・アドバタイザー』(*New York Daily Commercial Advertiser*) に発表されたのだが、非現実的であったために説得力にかけたものであったとハインズは述べている。だが、少なくとも 25 年後の 1858 年に同様の見解を発表したソローに影響を与えたのではないかと記している⁽¹⁷⁾。ソローは『アトランティック・マンスリー』(*Atlantic Monthly*) 誌上に、「昔の英国の王達はスポーツや食料のために、王の狩猟のための禁猟区を持ち、そういった地域を作るためにあるいは拡大するために時として集落さえもそのためにつぶしたりしたが、たぶんそれは本能に基づくものではなかっただろうか。こういった王の権威を拒絶した我々は集落を破壊されることなく、むしろその中において熊や豹や狩猟民族が居住する国立保護地域 (National Preserves) を持つのではないか。それは王の狩猟地であるだけではなく、その地を創造した王自身も保護し、スポーツや食料のためではなく、インスピレーションを呼び起こし我々の真のレクリエーションの場としての森林である」と述べている⁽¹⁸⁾。

ここでも見逃してはならない点は、ソローが保護地域内における集落の存在や狩猟民族の居住を認めているということである。しかし、チッテンデンもハインズもこのカトリンやソローの考え方は飛躍した考え方であるとし、その理由として保護地域内に人々が居住する環境は不安定であるからとしている。このようにアメリカ人にとって地域制の国立公園は管理できない公園として捉えられたようである。

③ デービッド・E・フォルサム (David E. Folsom)

フォルサムは 1870 年のウオッシュボーン探検隊の際にイエローストーンを保護区として保護することをウオッシュボーンに提案しており、N. P. ラングフォードがその証人であるとチッテンデンは述べている。このフォルサムの影響が大きい理由は、1869 年にフォルサムがチャールズ W. クックとウイリアム・ピーターソンの三人で探検をした際の報告を聞いたルイスがウオッシュボーン探検隊を組織することを考えたからである⁽¹⁹⁾。

④ トーマス・F・ミーガー (Thomas F. Meagher)

ミーガーはモンタナ准州の知事代理となった政治家であったが、同時にジャーナリストでもあった。1865 年の 10 月末にミーガーがヘレナからベントン砦に向かう途中でひどい吹雪に見舞われ、イエズス会の神父のクッペンたちのいる伝道所に避難をした。温かいもてなしを受け、何日か嵐がおさまる間、クッペンたちが見てきたイエローストーン地域のグランドキャニオンやファイヤーホール流域の間欠泉などの話を聞くと、ミーガーは、「それが本当であれば、その地域を国民の公園として保護すべきである」と述べた。そして、その地域を探検し、その報告書を政府に送る努力をすべきだということで全員が一致した。ミーガーはこの時にすでに 1864 年に成立したヨセミテ渓谷のことを議会議事録 (Congressional Globe) や、1866 年 7 月 14 日の “Verginia City Montana Post” の記事などによって知っており、それを意味しての発言ではなかったかといわれている。この時に同行していたのがコーネリアス・ヘッジスであった⁽²⁰⁾。

⑤ コーネリアス・ヘッジス (Cornelius Hedges)

コーネリアス・ヘッジスのバックグラウンドもフォルサムやクックと同様にイングランドの出身でハーバード大学出身の弁護士であった。しかし、

ヘッジスがこの件に関して出版した記事からは充分な彼の意図や動機を確かめることは出来ない。「イエローストーンレーク」の記事に使われた言葉は、ヨセミテグラントがカリフォルニア州に譲渡されたように、モンタナ准州に譲渡されるべきである、というようにも受け取れ、もしこの解釈が正しければ、ヘッジスは国立公園というより州立公園を考えていたのだろう⁽²¹⁾。また、ヘインズによると、彼はミーガールの考えを復唱したものであると述べ、その根拠として彼がミーガーと一緒に出掛けた1865年のヘレナからベントン砦の旅を挙げている⁽²²⁾。

いずれの説にしても、一番ヘッジスの考えに大きな影響を及ぼしたものはヨセミテグラント州立公園の成立ではないかといわれているのが有力である。なぜなら、ヘッジスが探検から戻ってヘラルド紙に寄稿した記事にそういったことを提案している文を見つけることが出来る。それではなぜ、州立公園としてイエローストーンは制定されなかったのだろうか？ この一番の大きな原因は、イエローストーン地域がこの公園設立に奔走したモンタナのグループの願いに反して、肝心の地域がワイオミングにかかっており、モンタナが無理に土地を譲り受けようとすれば周辺の准州を刺激することになり、これをモンタナ准州が譲り受けることは難しかったからである。そこで考えたのが国有地化することによる公園の成立だったという説が有力である⁽²³⁾。したがって、もし公園区域がモンタナ准州の領域だけであったならば、ヨセミテ・グランテのような州立の公園の成立という結果になっていたかもしれない。

II. ウォッシュボーン＝ラングフォード＝ドーン探検隊について

それではこの1870年の探検隊がどのように編成され、探検が実施されたのかをまとめてみよう。探検隊の数は荷物係や料理人を入れて合計19人で、1870年8月22日にエリス砦を出発し、一行が帰国の途につき、ヴァージニア・シティから14マイルの牧場にたどり着いたのが9月22日の

午後であった。ランフォードのヘレナ到着は9月25日の夕方であった。ウォッシュボーンとハウザーは翌日の26日に、ヘッジスやスミス等は荷物を運んだ隊ともども9月27日にヘレナに戻ってきた。一行の中でエバーツが途中で行方不明となり、彼が後に見つけ出され、生還したのは11月4日であった⁽²⁴⁾。

この1870年のイエローストーン探検はウォッシュボーン・ドーン探検としても知られているが、当初は多くの人々の関心をひきつけ、モンタナ准州の主だった人々によって、この探検を組織する動きが始まった。しかし、このプロジェクトが8月中旬まで具体化せずにはいた間、インディアンについての不穏な情報が入り、多くの人が参加を断念し、ついに残ったのが9人だけであった。探検隊のメンバーは民間人が9人、軍人が6人、それに荷物係が2人、料理人が2人の合計19人である。主な探検隊のメンバーは次のとおりである⁽²⁵⁾。

1. ヘンリー・D・ウォッシュボーン総司令官 (Henry D. Washuburn) 探検隊の隊長でモンタナ測量士の長でもあった。
2. ナサニエル・P・ラングフォード (Nathaniel P. Langford) この探検で発見したニュースを「スクリブナー」(Scribner's) 誌に連載でのせた。また、イエローストーン国立公園の初代の管理所长に就任した。
3. サムエル・T・ハウザー (Samuel T. Hauser) ヘレナ第一ナショナル銀行頭取で後のモンタナ准州の知事となった。
4. ウォーレン・D・ジレット (Warren D. Gillette) キング & ジレット会社経営者
5. ベンジャミン・F・スティッキニー (Benjamin F. Stickney) Stickney & Ellis プラント, スティッキニー & エリス鉱山及び運輸会社
6. トルーマン・C・エバーツ (Truman C. Everts) 元モンタナ准州内国税課税評価人
7. ウォルター・トランボル (Walter Trumbull) エバーツの補佐で、トランボル上院議員の息子。彼は1871年6月の「Overland

Monthly」に探検記事を載せている。

8. コーネリアス・ヘッジス (Cornelius Hedges) キャンプファイアの夜の国立公園の提案者といわれている。ローレンス & ヘッジス法律事務所弁護士でヘレナ・ヘラルド紙記者
9. ヤコブ・W・スミス (Jacob W. Smith) 元モンタナハイド & ファー会社

以上の人々に加えエリス砦のハンコック大佐の命によりグスタフ・C・ドーン少尉 (Gustavus C. Doane) が指揮する第二騎兵隊が先導。その他 40 頭の馬とラバ、それに犬のブービー (Booby) が同行した⁽²⁶⁾。

一行はまず、ヘレナから 125 マイル離れたエリス砦に向かった。そこでハンコック総司令官が約束していた軍隊のエスコートと合流し、そこから出発した⁽²⁷⁾。

最初の晩のキャンプはトレイル沿いの川で 2 日目にはインディアンを目撃している。探検隊の一行が現在の公園地域に入ったのが 8 月 26 日だった。ドーンとエバーツは兵隊一人とハンター二人を引き連れて先に第三渓谷の水際沿いからガーデナーとタワークリークの間の高地を横切り、日暮れ時になったのでそこで野営をした。次の日の午後に残りの隊が到着した。この美しいタワーの滝を調査するために一行はここで 2 日間を費やした。ここでは温泉の形成を見ることができただけではなく、初めてイエローストーンのグランドキャニオンも眺めることができた⁽²⁸⁾。

8 月 29 日の朝 8 時に一行はタワークリークを出発し、ウオッシュボーン山の東側面を南に向かって進んだ。そこからそびえたつ山を下り、右手に位置するウオッシュボーン山の頂上にたつと、そこには美しい景観が目の前に広がっていた。そこには渓谷あり、滝もあり、湖ありの風景で、温泉や間欠泉の十分な証拠も見つけたのである。山沿いの道を荷物を積んだ隊が 12 マイル程進みキャンプにたどり着いた。その晩、ウオッシュボーン、ドーン、ヘッジスは一行より先に出かけ、山の南側に広大な泥の温泉を発見した。そしてついにイエローストーンの途方もない広がりを持つ渓谷が

見渡せる崖の淵にたどり着いた。これが近くから見る最初の本物の景観だったが、すでに暗くなってきており、その日はそれ以上確かめることが出来なかった⁽²⁹⁾。翌日に一行はカスケード・クリークに近いイエローストーンの滝に到着した。ここは現在クリスタルの滝という名がついている。8 月 30 日及び 31 日とこのキャニオンの周辺を調査し、滝の測量などで時間が経過した。9 月 1 日にアラム・クリークを過ぎるころ、泥の間欠泉地域を発見した。9 月 3 日にはイエローストーン湖岸に到着、そこで野営をした。一行はそこで一日過ごした後、ゆっくりしたペースで湖の東岸にむかってゆっくりと旅を続けた。9 月 7 日には一行はイエローストーンの上流部を歩いて渡り、湖の南側の何本か延びた入り組んだ入り江のほとんど通れないような状態になっていた倒木の間を横切った。9 月 9 日にはエバーツが彼のすべての持ち物を積んでいた馬を見失い、それを探すために隊から離れ、そのまま行方不明となってしまった。一行はこのエバーツを探すためにほぼ一週間を費やした。しかし、イエローストーン湖の西岸に温泉の流域を見つけた他には、彼を見つけ出すことは出来なかった。そこで、一行は彼が殺されたか、あるいは迷いながらも町に戻ったかのどちらかだという結論に達して探検を進めることとした。この辺で一行も景観を見ることに飽きてきて、もうほとんど見尽くしたと思い、マディソンに戻ることにし、山脈を横切り、川に沿って歩くことにした。9 月 17 日の朝に出発し、でこぼこの丘をこえ、倒木の間をすりぬけ、大陸分水嶺を 2 度横切り、ファイアール川の小さな林間の空地に設営をした。2 度目の分水嶺を渡ろうとした時にショショーン湖がちらりと見え、まちがえて、それをファイアール川の源流だと思ってしまった⁽³⁰⁾。

一行のほとんどの探検目的は観光のための参加であったが、ウオッシュボーンはフォルサムの手伝いでイエローストーン川の西岸ルートを探していた。南側に続く崖の淵を馬で偵察に行き、そのそびえたつ頂上からイエローストーン湖を見ることが出来た。ウオッシュボーンがキャンプに持ち帰った情報による功績で、その山頂には彼の名前が

けられた。その日の午後、ヘッジスは滝の真上にある『見晴らしの場所』と彼が名づけた高台の場所に行き、哲学的思索にふけていた。彼はそこにすわり、この眺めについて記録していたが、すべてが見たこともない景観だったと述懐している⁽³¹⁾。

9月18日朝9時に一行は出発し、まもなくケプラーの小滝の上のファイアーホールに到着した。そこから今度は小川沿いに下っていった。一行は間欠泉にむかっていたが、森林がうっそうと生い茂っていたために、半径数百フィート先ぐらしか見ることが出来なかった。一行はすでに家路にむかう気持ちになっており、あわよくば行方不明になった仲間を見つけ出しながらという気持ちで進んでいた。すると突然、木のない開けた谷が眼前にあらわれた。それは澄み切ったひんやりした9月の正午ごろのことだった。一行の前からおおよそ200ヤードのところ、円筒の水がけむりをたなびかせながら150フィート近く空に向かって吹き上がっていくではないか。輝く太陽がその透明な水をきらきら輝くクリスタルの塊のように見せ、やわらかい風が煙を白いカーテンのようにして谷の右側に向かって流れて行った。これがまさに“Old Faithful”だったのである。一行はその日と次の日の午前中をこのアッパーベースン(Upper Basin)で過ごした。そしてかの有名な9月19日のキャンプファイアーの夜を迎えるのである⁽³²⁾。

一行はUpper Basinで7つの主だった間欠泉を発見した。そこからthe Middle Basin, the Lower Basinの川沿いを進んでいった。すでに底をつき始めた食料の心細さに加え、行方不明になった仲間も見つからない状態の中で、みんなの心はもっと新しい景色を見たいというよりは、早く町に戻り自分たちが見たものを人に話したいという気持ちがどんどん強くなり、9月19日の夕方にファイアーホールとギボン川が合流してマディソン川を形成している場所でキャンプをするのである。このキャンプファイアーの話については前述したように、ラングフォードの日記により引用されたものが、今は定説のように語られているが、

ハインズは否定している⁽³³⁾。

帰途についた一行はマディソン川をくだり、今までしてきた旅について語り、また、彼らが見てきたことを世界中の人たちにどのように興味深く話そうかなどと語りいながら、バージニアシティから14マイル離れた牧場にたどり着いた時には9月22日の午後になっていた。翌日の朝、ラングフォードは町にエバーツの行方不明のニュースを知らせるために、先に馬を走らせた。その日の遅くにエスコートしていた軍隊は一行と別れ、エリス砦へと向かった。軍隊の責任者であったドーンは9月24日の午後に帰還の報告をした。9月27日の夕方に馬やラバの背に荷物を載せた一行もヘレナに到着した⁽³⁴⁾。

ランフォードがバージニア市から馬車でヘレナに戻ったのが25日の夕方で、ウオッシュボーンとハウザーは次の日に戻った。ヘッジスとスミスは荷物を積んだ一行が到着する前に戻ってきた。しかし、彼らはまさに疲れ果てた集団だった。ランフォードの体重は190ポンドから155ポンドに落ちていた。ヘッジスも幼い娘が気づかないほど変わっていたという。ジレットと二人の兵隊はエバーツがみつからなかったというニュースを持って10月2日に戻ってきた。しかし、ヘッジスの事務所の共同経営者であったR. ローレンス判事は600ドルの報奨金を出し、エバーツの更なる発見を祈った⁽³⁵⁾。

これを受け、ジョージ・A・プリチェットとジョン・バロネットが探しにでかけ、無事にエバーツを見つけ、ヘレナに戻ったのが11月4日でこれが探検隊の締めくくりとなった。

11月11日にエバーツはウオッシュボーンから晩餐会の招待状をもらった。まだ彼の健康は充分回復はしていなかったがでかけた。1870年11月14日にイエローストーン探検の成功を祝う晩餐会が開催されて、ドーンを除くすべての探検隊の隊員参加のもとに会は締めくくられたのである⁽³⁶⁾。

その後、それぞれの隊員はイエローストーンについての記事をいろいろなところに書いているが、コーネリアス・ヘッジスは10月6日から11月9

日にかけてヘレナ・ヘラルド (Helena Herald) にこの旅について連載記事を書いた。ジレット、ラングフォード、ウオッシュバーンもヘレナ・ヘラルドに情報を提供し、それは何度も再版された。また、多くの新聞でもこの記事を大きな見出しでとりあげ、“Denver Rocky Mountain News”も『山のロマンス』と題する見出しでイエローストーンについて取り上げた。その他、ニューヨーク・タイムズやタイム誌でも大きな記事として扱われた。その他ラングフォードがスクリプナー誌 (Scribner's) にトーマス・モランの版画とともに『イエローストーンの驚異』と題する記事を書いた。このようにして、イエローストーン探検の物語は全米の話題となった⁽³⁷⁾。

Ⅲ. 法案成立過程

それでは、この国立公園のアイデアが法案としてグラント大統領によって署名されるまでの流れをまとめてみよう。

この公園実現のために積極的に動いたのがナサニエル・P・ラングフォード、コーネリアス・ヘッジス、ウィリアム・H・クラゲットたちで、彼らは丁度モンタナから議会で議員として選出されていた。そしてそれぞれがこの地域を国立公園とするための普及啓発活動を行っていた。議会で始まるとラングフォードはワシントンに行き、彼とクラゲットで公園法案を作成した。公園の境界はハイドンに依頼した⁽³⁸⁾。

1871年12月18日にクラゲットによって議会で法案が提出された。カンサス州選出のポメロイ上院議員が同じように上院においても提出してほしいと要望を示すと、クラゲットはその法案を提出した後、そのコピーを上院議員会館に持って行き、ポメロイ上院議員に渡した。彼はすぐさまその法案を上院に提出した。それぞれの院からその法案は公共の土地委員会に提出された。議会でミネソタ州選出のマーク・H・ダンネルがこの法案に関する小委員会の議長となり、1872年1月27日の気付けで内務長官宛にこの法案についての意見を尋ねるべき手紙が提出された。1月29日付

で内務長官からこのプロジェクトを全面的に支持するという返答がきた。また、ハイドン博士による短い報告書も提出された。この報告書にはこの地域の主な見所等がまとめられていた⁽³⁹⁾。

したがって、この法案はハイドン、ラングフォード、そして議員のクラゲットの三人の努力によってまとめられたものといえる。ハイドンはこのプロジェクトの重要な人物となった。というのも、1871年の探検において政府を代表する立場にあったからである。彼はすでにこのプロジェクトのことをよく周知しており、十分な写真や標本を前年の夏にすでに集めていた。これらは展示され、多くの議員たちも目を通していった⁽⁴⁰⁾。

ラングフォードも前の年の5月6日にスクリプナー誌にこのことを載せており、この雑誌の400部が購入され、この法案の投票日に向けて議員のデスクに配られたのである。議会で開かれていた冬の間、彼はずっとこの仕事に費やした。クラゲットは最初から最後までモンタナのために努力した人物である。上院においてこの法案は1月30日に上程され、何人かの議員の声明によって支持された。カルフォルニア選出の上院議員のコール氏は反対した。理由はカルフォルニアのヨセミテの個人による先買権が絡んでいたからである⁽⁴¹⁾。

上院の法案は下院の議長から2月27日にあがってきた。議長のダンネルは公共の土地委員会からこの法案を上院でも早く通すよう指示されたと述べた。マサチューセッツ州選出のH. L. ドーズ (H. L. Dawes) がこの法案を支持し、多くの票を獲得して法案が通過した。1872年3月1日にその法案にグラント大統領は署名した⁽⁴²⁾。

Ⅳ. 法案成立の理由について

この画期的といわれる国立公園思想が法律制定にいたった要因を挙げるといくつかの理由がでてくるが、最大の要因はモンタナ准州の利益を考えていた探検隊のメンバー、それにハイドンの学者としての議員たちを充分説得するに値する資料の提出がそろって、結果的に法案が可決されたと見てよいだろう。しかしそれにもまして一番大きな

要因は、J. クック (Jay Cooke) 率いるノーザン・パシフィック鉄道の事業拡大のためのロビー活動であった。なぜなら、この法案を動かしたキーマンたちはノーザン・パシフィック鉄道の利権でつながっていることが明らかだったからである。

1. ノーザン・パシフィック鉄道の役割

ナサニエル・P・ラングフォードは、彼の最初の N. P. をとって別名、National Park Langford と呼ばれる程、彼はイエローストーン探検に関して多くの報告や講演をし、国立公園成立の立役者となった人物である。しかし、探検隊に参加した当時の彼は無職であり、ノーザン・パシフィック鉄道と講演による広報活動の契約を交わしていたのである。しかし、彼はノーザン・パシフィック鉄道スポンサーの講演では国立公園制定について話はしなかったとされているが、少なくともアメリカの歴史家たちは、ラングフォードが1871年1月19日にワシントンのリンカーンホールで講演した『イエローストーン探検』についての講演がハイドンに与えた影響が大きかったという点では一致している。また、彼の義理の兄はJ・クック会社の役員だったという点も、ラングフォードとクック鉄道会社の絆を示すものであろう⁽⁴³⁾。

また、議会に法案を提出した下院議員のケリーはアサ・ウィットニーの影響で鉄道開発に深い関心を持っていた。また上院でこの法案を提出したネットルトンはノーザン・パシフィック鉄道の重役であり、ケリー下院議員はこのネットルトンを通して、ハイドンに議会ロビーを要請したのである。したがって、1871年時にはすでにノーザン・パシフィック鉄道は国立公園のアイデアを持っていたといわれる⁽⁴⁴⁾。

2. ハイドンの貢献

ハイドンの克明な調査報告書が動かぬ証拠として提示され、その壮大な景観の存在が裏付けられた。

ケリー下院議員の提案に関してネットルトンによりロビー活動を要請されたハイドンは学者としてこの地域に関心を抱いており、また下院の有力

議員であったヨセミテグランテの法案の立役者でもあったヘンリー・L・ドーズとも近い関係だった。また、この法案提出のためのキャンペーンに大変役立ったのがハイドンがイエローストーンで集めてきた標本だった。これらがキャピトルやスミソニアン博物館で議会の開催中に展示されたのである。これらを議員が見たことは言うまでもない。またこういった展示だけではなく地理学者として、ハイドンはこの公園候補地の地理学的価値やその他の特色について熱心に説明をした。こういった標本や写真での議員への説得は大きな影響を与えたのだった⁽⁴⁵⁾。

3. 文学の影響

一方東部の文学の影響でこういった自然保護の思想が広まり、そういう哲学を持つ人が増えていた事も影響を与えた。

アメリカでは1800年代に多くの自然研究家を輩出しており、ジョン・キンシー・アダムス (John Quincy Adams)、ジェームズ・オデュボン (James Audubon)、ヘンリー・D. ソロー (Henry D. Thoreau) などがいるが、ラルフ・ウォルド・エマーソン (Ralph W. Emerson) は1836年に『自然』という論文を発表し、トランセンダンタリズム〈超越主義〉の思想で多くのアメリカ人に深い影響を与えた。ソローはまた1845年から47年の2年間をコンコード郊外のウオールデン湖のほとりに住み、その自然生活の記録を1854年に発表し、やはり多くのアメリカ人に自然の持つ価値についての影響を与えている。また、1864年にはジョージ・パーキンス・マーシュ (George Parkins Marsh) が『人間と自然』 (*Man and Nature*) を出版し、アメリカ人の自然保護の意識を高めた。こういった自然保護思想や自然を尊ぶ文学が出てきた背景にはアメリカ社会の変化と深いつながりがある⁽⁴⁶⁾。

南北戦争後のアメリカは国家統一が進み、連邦政府の権限が強まると同時に、この戦争による北部の勝利は近代産業主義の勝利を意味するものでもあった。その結果、工業化の進展はめざましいものがあり、アメリカは世界でも有数の工業国と

なっていくたのである。また、都市への人口集中も進み、アメリカ社会は商業資本によって支配される国となっていくた。その結果、ビッグビジネスが徐々にその地位を築いていき、お金がものという時代になっていくた。政治と商業資本の結びつきは赤裸々となり、贈賄、収賄などの政治的腐敗が横行し、金銭万能主義が時代を物語る精神ともなっていくた。特にこの頃の鉄道建設事業はその代表的な例となった。したがって、鉄道会社が議会で盛んにロビー活動を行い、広大な土地と補助金を獲得するために奔走する姿は当たり前現象であった。こういった商業の発展は、逆に農民や労働者階級の貧困を生み、成功を求めて移住してきた移民たちの屍が、これらの鉄道建設の枕木になったといわれるほど酷使され、悲惨な生活を送っていたのである。かの有名な作家のマーク・トゥエインはこういう時代を風刺した『金メッキの時代』という小説を1873年に出版している。したがって、この時代はエマーソンやソローに代表されるトランセンダンタリストたちの精神と物質的な欲を優先する人たちの両方の個人主義が実存した時代といっていくた(47)。

4. レジャー、レクリエーションの拡大

アメリカの工業化は富む者と貧しいものの格差を広げ、やがて、富を獲得した成金たちが次に求めたものが、自分たちが持ち合わせていなかった文化的な優越感であった。その結果、アメリカの上流階級はヨーロッパ文化への回帰現象を起こし、いちやくヨーロッパブームが到来するのである。ヨーロッパ建築を建て、ヨーロッパの美術品を買い求め、ヨーロッパ貴族と結婚することを夢見るのであった。同時にヨーロッパへの旅行を熱心に行った(48)。また、中産階級のレジャー、レクリエーションも盛んになり始めていた。国内ではナイアガラへの聖地巡礼の旅をする人も多く、1840年代には年間4万人を超す観光客が訪れていたという。さらに交通手段の発達によって、その数は増え続け、逆にナイアガラの景観の破壊が問題となるほどだった。こういった景観破壊に対する非難をしたのはアメリカ人ではなく外国人だったた

めに、彼らの良心を目覚めさせ、それがイエローストーン国立公園の保護思想につながったことも考えられる(49)。

おわりに

このようにアメリカの国立公園成立の歴史をひも解いてみると、国立公園の概念はキャンプファイアの夜のコーネリアス・ヘッジス一人の考えから生まれたものではなく、その前後の出来事の流れからこういった概念が誕生してきたことがわかってくる。まずは最初にこの地域を紹介した画家カトリンがおり、そのことに興味を示したルイス・クラーク探検隊がおり、それを聞いたクラークがフォルサム・クックの探検を編成し、この結果がウオッシュボーン・ラングフォード・ドーン探検隊へと結びつき、それに鉄道会社の西部への参入が重なり、といった具合で必然と偶然の重なり合いが、この新しい概念を誕生させたといっていくた。また、当初はヨセミテの州立公園をモデルとしつつ、最終的には政治的な駆け引きの中で国立公園が誕生したと理解すべきである。

アメリカの国立公園は①広さと自然性、②国家の責任、③国民のための公園として成立したのだが、実際のところこの公園制度ができて、まだ西部の国立公園へ行ける大量の輸送手段はなく、初期の頃の公園への到達手段は馬か幌馬車で、非常に悪い道のりと限られたサービスで旅するものであった。したがって、イエローストーン国立公園が成立した1872年の公園利用者数はたったの300人であった。そこで、鉄道会社の出番となるのである。ノーザン・パシフィック鉄道は当初は公園内での使用権利を取得し、鉄道を公園内まで建設する予定でもあった。しかし、幸か不幸か経済恐慌により、この建設が延びてしばらくは何も出来ない状態であった。それでも、1880年代初めにノーザン・パシフィック鉄道会社はモンタナのリビングストーンに鉄道駅を建設し、これがイエローストーン国立公園への利用者数を増加させている。公園設立から11年経た1883年には5,000人の観光客がイエローストーンを訪れている。ま

た、1908年にはユニオン・パシフィック鉄道も西イエローストーンをつなぐ鉄道を建設し、観光客はより訪れやすくなったのである。また、最初に管理を任されたラングフォードは無給で公園の管理を引き受けたが、実際はなにもしておらず、公園内の密猟の件数はかなりあった。そのため、後に解雇され、フィリタス・W・ノリス (Philetus W. Norris) が任命されるのである。また、こういった地域の密猟者を取り締まる世界初のレンジャーも採用された⁽⁵⁰⁾。

それではイエローストーン国立公園誕生の「最初の」とか「画期的」という本当の意味は何だったのだろうか？ それはかつての王族、貴族、特権階級のものであった公園が、「すべての国民のための」という民主主義的なアイディアとしてその制度が発足した点ではなかったのだろうか？ これこそ、南部の奴隷開放を叫び、虐げられた労働者階級の労働運動のひとつとして要求された民主的な制度の創設ではなかったのか。すなわち、これほどの広い地域を地位や富の差に係わらず、すべての人々のために設置されるというアメリカのデモクラシーの精神がここに証明されたことに他ならない。

アメリカの人々のレジャー・レクリエーションは共有地の利用に始まり、墓地の利用を経て、都市公園、州立公園、そして最後に連邦政府によるすべての人々の利益のための (“for the benefit and enjoyment of the people”) 「国立公園」としてついに花開いたのである。しかし、その実現の手段がアメリカの格差社会を引き起こした工業化進展の申し子とも言える鉄道事業のためのロビーイングによるものが大きかったというのはなんと皮肉な話である。

日本においても、日本の国立公園導入に関して日本の鉄道事業が与えた影響は大きいものがある。例えば、鉄道院運輸部旅客課から欧米各国に派遣された木下淑夫はアメリカやカナダの国立公園を見て帰り、帰国してから帝国議会で国立公園設立の主張をしたといわれている。また鉄道院総裁だった後藤新平は、1906年に鉄道が国有化され、観光が盛んになりつつあった中で更なる国際観光を

推進しようと、部下の木下淑夫に議会で証言させている⁽⁵¹⁾。このように日米の国立公園は営造物と地域制の公園という運用の違いこそあれ、どちらの公園の発祥もまずは利用ありきから誕生したとってよいだろう。

《註》

- (1) 池ノ上容、櫻井正昭「連載対談(9)国立公園を語る」『国立公園』No. 478, 1989, p. 43.
- (2) 環境庁自然保護局編『自然保護行政の歩み』, 第一法規出版株式会社, 1981, p. 33.
- (3) 岡島成行『アメリカの環境保護運動』岩波新書, 1990, pp. 66-74. なお、岡島の本の中には何ヶ所かの年代記述の間違ひを見出すが、その中でも、隊の出発と帰還の日付は明らかにおかしい。なぜなら、あの画期的なキャンプファイアーの出来事は9月19日であるのに、一行がすでに8月27日に戻ったと記している。p. 72 参照。
- (4) 畠山武道『アメリカの環境保護法』, 北海道大学図書刊行会, 1992, pp. 249-255.
- (5) 伊藤太一『イエローストーン国立公園の誕生とその今日的意味 (I) — 公園の成立過程と神話の誕生 —』『国立公園』, No. 514, 1993, pp. 2-6.
- (6) 加藤則芳『日本の国立公園』, 平凡社, 2000, pp. 24-27.
- (7) 上岡克己『アメリカの国立公園：自然保護運動と公園政策』, pp. 41-48.
- (8) 田村剛編『日本の国立公園』, 財団法人国立公園協会, 1951, p. 3.
- (9) 加藤, p. 25.
- (10) 上岡, pp. 42-43.
- (11) 同上, p. 186 の注(22)参照
- (12) 伊藤, p. 5.
- (13) Aubrey L. Haines, *The Yellowstone Story Vol. I—A History of Our First National Park—* (Wyoming: Yellowstone Library And Museum Association, 1977), p. 130.
- (14) James S. Macdonald Jr., *The Founding of Yellowstone into Law and Fact*, <http://www.yellowstone-online.com/paper.html>, p. 4.
このジェームズ・マクドナルドはイエローストーンに関する修士論文を1996年5月にオハイオ・ノーザン大学に提出し、現在、イエローストーンを保全する活動家としてイエローストーンに関する記事を自分のホームページに載せ続けている。
- (15) Haines, p. 156.
- (16) *Ibid.*, p. 161.
- (17) *Ibid.*, p. 162.
- (18) *Ibid.*, pp. 161-162.
- (19) Hiram Martin Chittenden, *The Yellowstone National Park: Historical and Descriptive* (St.

- Paul: J. E. Haynes, Publisher, 1927), p. 73.
- (20) Haines, p. 164.
- (21) *Ibid.*, pp. 134-135, p. 164.
- (22) *Ibid.*, p. 90, p. 163.
- (23) *Ibid.*, p. 166.
- (24) *Ibid.*, p. 134.
- (25) Chittenden, pp. 62-63.
- (26) *Ibid.*, p. 63.
- (27) *Ibid.*
- (28) *Ibid.*, p. 65.
- (29) *Ibid.*, p. 66.
- (30) *Ibid.*, p. 67.
- (31) Heines, p. 113.
- (32) Chittenden, p. 68.
- (33) Heines, p. 138.
- (34) Chittenden, p. 69.
- (35) Heines, p. 130.
- (36) *Ibid.*, pp. 130-134.
- (37) *Ibid.*, pp. 135-136.
- (38) Chittenden, p. 76.
- (39) *Ibid.*
- (40) *Ibid.*
- (41) *Ibid.*, p. 77.
- (42) *Ibid.*
- (43) Macdonald, p. 4.
- (44) *Yellowstone National Park: Its Exploration and Establishment Part III: The Park Movement, p. 2.* http://www.nps.gov/history/history/online_books/heines1/ice3.a.htm
- (45) *Ibid.*, p. 5.
- (46) 佐藤昌『欧米公園緑地発達史』, (株)都市計画研究所, 1968, p. 262, 紀平英作, 亀井俊介『世界の歴史 23: アメリカ合衆国の膨張』, 中央公論社, 1998, pp. 351-356.
- (47) *Ibid.*, pp. 361-368.
- (48) *Ibid.*, p. 196.
- (49) 上岡, pp. 24-28.
- (50) *Yellowstone, The First National Park* <http://memory.loc.gov/ammenm/gmdhtml/yehtml/yeabout.html>, p. 4.
- (51) 親泊素子「国立公園事始」『FRONT』Oct. 2001, pp. 16-18.

参考文献

- 1) Chittenden, Hiram M. *The Yellowstone National Park: Historical and Descriptive*. St. Paul: J. E. Haynes, Publisher, 1927
- 2) Haines, Aubrey L. *The Yellowstone Story Vol. I - A History of Our First National Park -*. Wyoming: Yellowstone Library and Museum Association, 1977
- 3) 島山武道『アメリカの環境保護法』北海道大学図書刊行会, 1992年
- 4) 池ノ上容, 櫻井正昭「連載対談 (9) 国立公園を語る」『国立公園』No. 478, 1989年
- 5) 伊藤太一「イエローストーン国立公園の誕生とその今日的意味 (I) — 公園の成立過程と神話の誕生 —」『国立公園』No. 514, 1993年
- 6) 上岡克己『アメリカの国立公園: 自然保護運動と公園政策』築地書館, 2002年
- 7) 加藤則芳『日本の国立公園』平凡社, 2000年
- 8) 環境庁自然保護局編『自然保護行政の歩み』第一法規出版株式会社, 1981年
- 9) 紀平英作, 亀井俊介『世界の歴史 23: アメリカ合衆国の膨張』中央公論社, 1998年
- 10) Macdonald, James S. *The Founding of Yellowstone into Law and Fact*. <http://www.yellowstone-online.com/paper.html>.
- 11) 岡島成行『アメリカの環境保護運動』岩波新書, 1990年
- 12) 親泊素子「国立公園事始」『FRONT』Oct. 2001
- 13) 佐藤昌『欧米公園緑地発達史』(株)都市計画研究所, 1968年
- 14) 田村剛編『日本の国立公園』財団法人国立公園協会, 1951年
- 15) *Yellowstone, The First National Park*. <http://memory.loc.gov/ammenm/gmdhtml/yehtml/yeabout.html>.